

平成 16 年 10 月の解説（府県天気予報）

【10 月の天候状況】

10 月は、台風や秋雨前線の影響で曇りや雨の日が多くなりました。日照時間数は、九州を除いて平年を下回り、東北地方の太平洋側では平年の 78% しかありませんでした。降水量も、東・西日本を中心に平年を大きく上回り、東海地方では平年の 3 倍を超える 382% になりました。月平均気温は、関東甲信地方や南西諸島で平年より低くなりましたが、その他は平年を上回りました。

9 日は台風第 22 号が静岡県に、また 20 日には台風第 23 号が高知県にそれぞれ上陸して、各地で洪水や土砂崩れなどの災害が発生しました。26 日は台風第 24 号から変わった温帯低気圧が本州南岸を東進したため、太平洋側を中心に天気がくずれました。この低気圧の通過後は一時的に冬型の気圧配置が強まって、青森で初雪が降り、札幌で 8 センチの積雪が観測されました。

【10 月の検証結果】

17 時発表予報の「降水の有無」の全国平均の適中率は、明日予報が例年^(注)より 1 ポイント高い 84% でした。明後日予報では、九州北部地方で例年よりやや低いのを除き、全国的に例年より高い所が多く例年より 3 ポイント高い 82% で、近畿地方は 10 ポイント高くなりました。

最高気温の予報誤差 (RMSE) は、全国平均では例年より 0.2℃ 大きい 1.9℃ でした。台風と長雨の影響で、東日本を中心に例年よりやや予報誤差の大きい地方が多く、その中でも関東甲信地方は例年より 0.7℃ 大きくなりました。

最低気温の予報誤差は、全国的に例年より小さい所が多く、全国平均も例年より 0.1℃ 小さい 1.4℃ でした。

(注) 例年値は気象庁 HP (評価) 内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

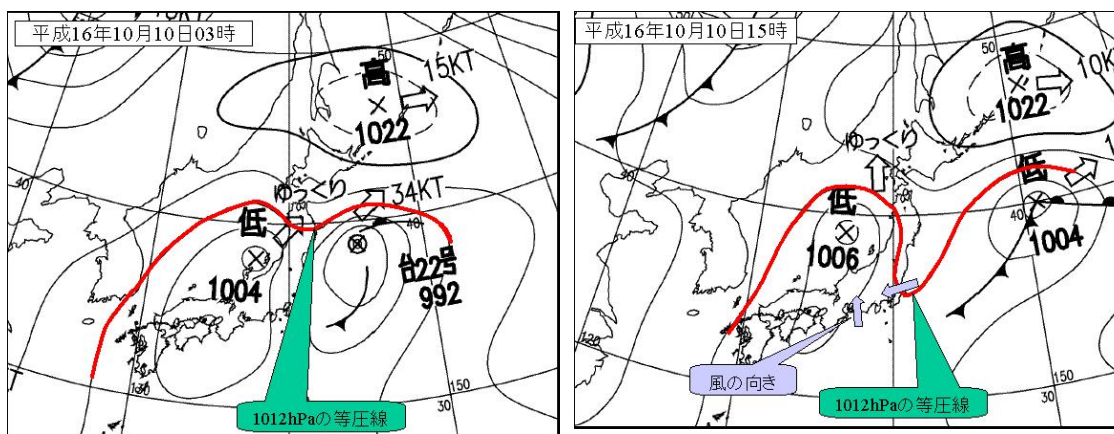
【10 月の天気予報から】——台風通過後の天気（9 日発表の東京の天気予報から）——

秋に台風が日本列島を通過した後で全国的に晴れることが多いのは、大陸からの高気圧に覆われやすいからです。しかし、台風の通過後であっても、日本付近に低気圧が残る場合には、天気の回復が遅れることがあります。

9 日 17 時の時点では、台風第 22 号の通過後に日本海に低気圧が予想されましたが、「翌 10 日の関東地方では、日本海の低気圧の南側を回り込む形で南西の風が吹くので、天気は回復する」との予想を基に、東京地方の予報を「晴れ時々曇り、最高気温は 28℃」としました。

しかし、10 日の実況では、日本海の低気圧と台風から変わった低気圧との間に引き込まれる形で千島近海に中心をもつ高気圧の南西端が関東の東岸付近まで張り出しました。このため、10 日の関東地方では、前日に予想した「晴天をもたらす南西の風」ではなく、「曇雨天を伴う冷たい北東の風」が吹きました。

北東風の影響を受けなかった東海地方では晴れ間も多く、南からの暖かい風が吹いたことから、名古屋の気温は 26.9℃ まで上がりました。一方、東京（大手町）では日射しがなく、最高気温も 19.9℃ にとどまりました。



【12月の天気予報の利用にあたって】

太平洋側の地方では、冬になると雷の発生日数が少なくなります。逆に、日本海側では冬に雷が多くなります。日本海側の地方で冬に雷が多いのは、冬型の気圧配置に伴って寒気が流入しても対馬暖流が流れる日本海の海水温度は高いので、大気の状態が不安定となって積乱雲が発生しやすいからです。今年（2004年）の2月22日には、小松空港（石川県）に着陸しようとしていた全日空機の機体に落雷しました。

陸上で落雷があれば、本格的な停電に至らなくても、人間の目では判別できない「瞬間停電（しゅんかんていでん）」の起きることがあります。各家庭への普及率が高いパーソナル・コンピュータはこの瞬間停電に対して非常に弱く、場合によっては、大切なデータが一瞬に消去されてしまうなどの深刻な被害を受けることがあります。

雷の発生が予想される場合は、府県天気予報の本文中に「雨で雷を伴う」などの表現で示しています。この時期、特に日本海側で生活している人は、これらの雷に関する情報にも注目してください。

